

# その20 津田

(平成9年2月1日号—第187号)

生駒山系の北、津田山のふもとに広がる落ちついた集落が、今回紹介する津田です。津田は、昭和30年に枚方市と合併するまで、津田村・津田町の名で、東部地域に受け継がれてきた由緒ある地名の一つです。

古い記録から写されたといわれる『興福寺官務牒疏』[こうふくじかんむちょうそ]<sup>\*1</sup>の中には、尊延寺や百済寺等とともに津田寺があり、他の寺院が天平年間(8世紀)に建立されていることから見て、津田の地名もこのころから存在したと考えられています。

津田の集落を東へ向かうと、国見山に至る道につながります。標高285メートルの国見山頂上付近には<sup>\*2</sup>津田城(国見山城)がありました。津田城は、延徳2年(1490)橋正信が築いたとされ、橋氏は津田の地名から津田周防守正信と名乗り、津田・穂谷・尊延寺等を領したとされています。津田氏は隆盛を誇っていましたが、織田信長の畿内平定の戦いで、天正3年(1575)に城は焼け落ちました。

その後、津田氏は国見山のふもと(本丸山)に居城を構えましたが、山崎の合戦で明智光秀方に加勢したため、秀吉軍に本丸山城も焼き払われてしまいました。

昭和になり、本丸山城等の遺構は発見されましたが、津田城の全容等は明らかではありません。

現在、津田には、関西学術研究都市の諸施設が集まり、本市の東部開発の拠点として整備されつつあります。新しい顔の津田を、戦国時代の武将はどのように見守っているのでしょうか。



34 春日神社(津田元町1丁目)



35 津田サイエンスコア(津田山手2丁目)

\*1 この史料は、近年、偽文書の疑いがあり、これに基づく記述は信憑性が乏しいという説がある。

\*2 以下の記述の基になった史料についても信用できないとする説もある。